

鷹取山

甲賀俊男

山の端に月は残り朝行を知らず太鼓は鳴り轟くも
夕ばれの鷹取山に霧深しひぐらしの聲遠くきこるつ
雷雨は止めど流れの激しくて小砂利刎飛び草ゆすりつ
雨晴れて生桓越しに子供らが落葉の中に栗拾ふ見ゆ
兄も征き弟も召されし故里に老ひたる父のひとりぬ給ふ
鈴虫を捕へむとわが近づけば一つなき止み遠くには啼く
蟋蟀が吾が枕べに鳴きたちて久しくやめず眠れざりけり

四季の思出

中村貫一

春

ふと見れば庭のかたへにつつましく乙女椿は咲き出でにけり
草に寝て見上ぐる空の花曇り春の想のひそけさに入る
吾が庭の乙女椿はつき／＼に咲きてこぼれて春たけにけり

至つては全く力盡きて、六月二日母は静かに逝つた、私は思ひを祖母の上に馳せる。いつかはこの日の来る事を豫期してはゐたであらうけれど、實際にこの報らせを受けつつた時祖母の心痛は如何ばかりであつたらう。親が子を送らねばならない、子に先立たれた母としての云ひ知れないものに。

去年の秋、丁度二學期の試験が始まる前日だつた、山は漸く寂しさを催す頃、又しても私は祖母の死に逢つた、母を失くしたからの私はこの祖母を唯一の心の頼りともして一層親しさを感じてゐた、それだけにこの事は私にとつて大きな心の痛手であつた。自分獨り捨てられた様な、今迄もつてゐた一切の望みをも失なつてしまつた様な、暗い冷たい氣持にさせられたのだつた。

さつきから私は机の上にかざられてゐる祖母の寫眞をながめ乍ら、ありし日のやさしい哀れた祖母の面影を偲んでゐた。ひっそりした部屋の中ではたゞ時を刻む時計の

ただ一人友のたより打たえて淋しきまゝに春逝かむとす

夏

初夏のおとづれきけば白雲の湧き出づる山のこひしかりけり
むし暑き一日は暮れて山里のあちらこちらにひぐらしの鳴く

秋

亡き友よ今はいづこに在するや君と語りし秋は來たるに
こほろぎの鳴く音うれしき友ときくすぎ行く秋の夜半の一とき
秋風に木々の葉寒く散りそめてつめたく成りぬ夕暮の道

冬

何氣なく取りし夕ホルの冷たさにひとしほ寒し初冬の朝
さら／＼と雑木林に風立ちて冬の短日くれて行なり
故郷の冬田につづく雑木山楢にみゆるあはき夕月

日 記 抄

辰 巳 紫

山原に霧たちこめてこの朝け梵鐘の音ふかくこもらふ
春あさき種蒔くと我が堀る土ゆこがり出でし冬籠り虫

音のみが、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

母

久 世 寛 瑞

「母」お母さん。」この言葉は僕にとつて
親み深く感ぜられるのである。子供が母を
呼ぶこの聲を聞く時は、僕はいつもやさし
い慈愛に満ちた母の顔を頭の中に思ひ起す
のである。世の中には西洋文明の讚美者、所
謂新しがりやが、母のことを、子供に「マ
、」と呼ばせてゐるのを聞くが、何となく
空な、そして親しみが薄い様な気がする。
やはり日本人は日本人らしく「お母さん」
と呼んだ方が遙かに親しみ深く眞實がこも
つて居ると思ふ、

世の中に母性の愛ほど偉大なものはない
その恩ほど極めて深く高いものはない。母
性愛と云ふものは人間ばかりでなく、あら
ゆる動物でさへ特に持つて居る共通した貴
いものである。どんな高貴な人でも、賤し